



CASA DE

* 本カタログは一部アイテム・デザイナーを抜粋して掲載してます。全アイテム・デザイナーは HP よりご確認くださいませ。

* 「◆」の印が付いているデザイナー商品は、全アイテムの卸売が可能です。

* 「◇」の印が付いているデザイナー商品は、一部アイテムの卸売が可能です。



HP



Online Store



Instagram



V-leg Office Chair (PH28)

Size: W510 D600 H780 SH435 AH665 mm
NT,DS/BK



Kangaroo Armless Lounge Chair (PH59)

Size : W585 D765 H600 SH335mm NT,DS





Easy ArmChair (PH29)

Size: W575 D715 H700 SH370 AH580 mm NT,DS/BK



Library Chair (PH51)

Size : W455 D470 H760 SH445mm NT,DS





Square Table (PH04)
Size : W915 D915 H710mm NT/BK



Armless Dining Chair (PH25)
Size : W445 D525 H860 SH445 mm NT,DS



V-leg Office Chair (PH28)
Size : W510 D600 H780 SH435 AH665 mm NT,DS

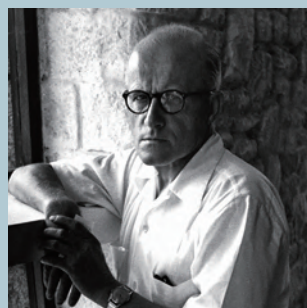
PIERRE JEANNERET

1896 - 1967

ピエール・ジャンヌレ

1896-1967

スイス、ジュネーヴ生まれ。



建築家であり、建築理論家、製図家、彫刻家、家具デザイナーでもあった、ピエール・ジャンヌレ。1921年にジュネーブ美術学校を卒業後パリに移住し従兄弟のシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ（ル・コルビュジエ）と共にアトリエを開設しました。ル・コルビュジエやシャルロット・ペリアンらとともに、20～30年代のデザイン界を牽引した人物のひとりです。20世紀を代表する建築物であるサヴォワ邸、クラルテ邸、パリのパヴィヨン・スイスなどを彼らと共に設計しました。第二次世界大戦中、ル・コルビュジエはヴィシー政権を支持し、ジャンヌレはレジスタンスに参加したため、この生産的な協力関係は終わりを告げました。

1955年、彼らはインドの新首都チャンディーガルのために再び団結し、ビジョンに満ちた都市の設計を始め、後にこの都市は現代の礎となりました。ル・コルビュジエはすぐにこのプロジェクトを他の人に任せることにしましたが、ピエールはさらに15年間そこに留まり、建築と家具のデザインのチーフアーキテクトとして仕事をしました。当時のインドは工業化が遅れていましたが、彼は、インドの伝統的な手工芸にデザインを合わせることで、モダンな精神を作り出し始めたのでした。彼はチークやサトウキビといった地元の素材を使い、シンプルな技術で家具を製作しました。それは冒険的な挑戦であり、シンプルであることが新しいモダンの表現を生み出すことになったのです。しかし、彼のデザインは苦勞の末に生まれたものではなく、シンプルな素材を使い、何ができるかを確認する喜びから生まれたものでした。彼は多くのプロトタイプをデザインし、取り外し可能で軽い家具を作ることが好きでした。だからこそシンプルな手段で作られた、遊び心のある名品ができたのです。しかし、それ以上に重要なのは、禁欲的な生活の複雑さを称えることでした。コルビュジエは、ヨーロッパの近代化から遠く離れた地で活動し、ジャンヌレは、低予算の材料で実験を行い、インドに適した技術と建築表現を開発する機会を得ました。自治体のアドバイザーとして、自治体の顧問として、自治体のオフィスの椅子をデザインしたり個人宅も多数手掛けました。以来、彼はこの国で最も有名なジャンヌレであり続けています。

彼はすべてのディテールをデザインし、風景、建築、家具の象徴的な統一感を作り出し、彼のデザインアプローチは、形式的なものでなく、自由、幸運、喜び、そして生活の一部であることを見出そうとする思想的なものでした。そのため、今日でもその家具は本質的で永遠の深みを表現しており、私たちの心に深く刻まれているのです。

Project Chandigarh

「プロジェクト・チャンディーガル」は、ジャンヌレがコルビュジエとともに多くの建築物を設計したインドの「チャンディーガル都市計画」の際、様々な建物のためにデザインした家具シリーズを再生産しているプロジェクトです。当時、同時期に大量の家具を必要としたため、ジャンヌレは現地インドで入手可能なチークの無垢材を用い、図面と大まかなアドバイスのみで製作可能なデザインを考えました。そのため同じ図面からつくられたにも関わらず、大きさや比率、部材の太さや角度などが様々な工房の職人によって異なる作品が数多く生産されたのです。このプロジェクトでは、当時のオリジナルの図面が残っているプロダクトのみを忠実に復刻しています。今では入手が困難となったチーク材は、新材とともに、築100年以上の建物に使われていた古材を再利用し、インドの工房「Phantom Hands」によって一つ一つ職人の手で制作されています。



Girafa Chair (BRUN01)
Size : W390 D430 H760 SH450 mm (Weight:6kg)



Girafa Stool (BRUN02)
Size : W390 D340 H450 ϕ 330 mm (Weight:4kg)



Girafa Table (BRUN05)
Size : ϕ 700 H720 mm (Weight:30kg)



SESC Pompeia Chair (BRUN09)
Size : W400 D500 H640 SH445mm

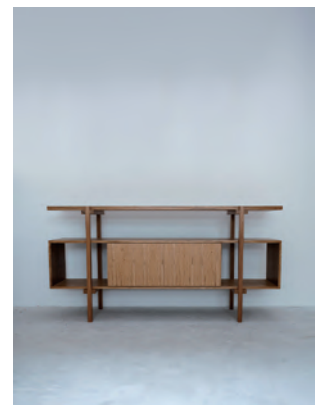
Carbon Girafa Chair (BRUN13)
Size : W390 D430 H760 SH450mm



Little Box for SESC Pompeia
Size : W660 D580 H580mm



Girafa Embroiderer (BRUN04)
Size : W350 D430 H690 SH250 mm (Weight:8kg)



Caicara Sideboard (BRUN11)
Size : W1800 D460 H900mm



LINA BO BARDI

1914-1992



リナ・ボ・バルディ

1914-1992

イタリア・ローマ生まれ。

ジオ・ポンティのもとでキャリアを積み、アートディーラーであったピエトロ・マリア・バルディと結婚しました。その後、サンパウロ美術館の立ち上げのため招致された夫と共にブラジルへ渡ります。家具デザイナーとしては、1949年にジャンカルロ・パランティとともに「スタジオ・ダルテ・パルマ」を設立。その工場はたった2年間のみの活動ではありましたが、プライウッドやブラジル原産の材料を使ったシンプルな構造のモダン家具を製造しました。リナが初めて家具のデザインをしたのは1947年サンパウロ美術館の講堂のための椅子でした。

1951年リナが36歳の時に、サンパウロのムルンビに、最初の建築作品となる自邸「ガラスの家」を設計し家具も手がけました。「ガラスの家」は建築作品としてのリナの処女作であり、内装や家具も含めてデザインした自邸です。傾斜地に建つこの住宅は、眺望の開けた方角を全面的ガラスファサード、山側を伝統的なデザインの居室部分として周囲の風景との一体化を図りながらリナ作品の特徴の一つである「現代建築と土着的建築の融合」を見事に表現している作品です。建設当時は植生のなかった土地にひとつひとつ植えられたのは全てブラジル原産の植物でした。ブラジル原産の熱帯植物を用いて建築をデザインすることはリナの特徴のひとつでもあります。リナは植物が単に好きだっただけではなく植物の種類を見分け、その特徴について語ることができました。植物への興味は生涯尽きることがなく、自然が環境のバランスを保ち、人類により良い生き方を教えてくれるという信条がインテリかつ現場主義者のリナの特質の根底にありました。この自邸の完成と共にリナはブラジル国民となりブラジルで生きていくことを選択しました。

リナは1973年4月と、「SESCポンペイア文化センター」設計中の1978年10月(58歳と64歳の時)に日本を訪れています。1回目は京都を中心に、2回目は東京を中心に鎌倉・日光をまわり、建築や風景、食事、文化、そして人びととの交流を楽しみました。建築家・丹下健三のもとを訪ねたともいわれています。リナは旅先で多くのスケッチやメモを残しており、この旅はその後の生き方へも大きな影響を与えたことが伺えます。リナが日本を捉える視点には、西欧と地理的に離れている独自の文化をもつブラジルとの共通点も含まれていました。ブラジルのあるべき姿を考え続けたリナにとって、国が独自の文化を守りながら近代化を進める日本の姿は、良い対象でもありました。規格的でありながらさまざまな組み合わせが可能な量や日本の伝統的な建具のシンプルな美しさに以前から興味をもっていたリナは、寺院や日本家屋、鎌倉近代美術館を訪れました。

1986年には、サンパウロ美術館の改築や、1986年のSESCポンペイア文化センターなど公共建築物をいくつも手がけています。イタリア・ミラノのNilufarGalleryが彼女にフィーチャーした展示を催した影響もあり、コレクター達からも大きな注目を集めています。

ブラジルでは「外国人」であり「女性」でもあったため難しい時代を過ごした彼女でしたが、多くの建築作品を残し、建築とデザインの社会的・文化的な可能性に追求した人生でした。



Round Dining Table T21A,B,D,E
4Size



Round Stool S31- A,B,C
3Size



Chair with 7-shaped Back S34
W400 D500 H730mm



All Wood Chair S28
W400 D400 H830mm



Wooden Bench and Cushion L09

[L09F] Simple 3 seats bench
Size: W1960 / D760 / H290mm

[L09G] 3 seats bench with back
Size: W1960 / D760 / H530mm



Shelves B30 -1

5Types





Full-stretched Leather Armchair S10-A
W680 D630 H590mm



Full-stretched Leather Armchair S10-B
W680 D630 H590mm



Full-stretched Leather Armchair S10-A



Large 4 Doors Sideboard R16
W2930 D610 H1120mm



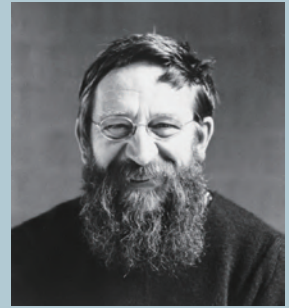
PIERRE CHAPO

1927 - 1987

ピエール・シャポ

1927-1987

フランス・パリ生まれ。



シャポは、当初、プロの画家を目指していましたが、造船技師との出会いにより、木材や木工芸に目覚め、パリ国立高等美術学校で建築を学ぶことを決意します。卒業後、シャポは妻で彫刻家・画家のニコル・ロルミエとともに、北欧や中米を広く旅するようになりました。その中で、フランク・ロイド・ライトの自宅兼アトリエであるタリアセン・ウエストを訪れ、この訪問が、その後のシャポの作品やデザインに多大な影響を与えることとなりました。

1950年代末に帰国したシャポは、妻の協力を得て、自分のデザインを形にして制作をし始め、販売を開始しました。彼のデザインに熱狂的なファンがつくまで、そう時間はかからなかったといえます。興味深いことに、最初の顧客の一人はサミュエル・ベケットで、シャポはベケットの有名な戯曲にちなんで「Godot bed」を制作しました。当初、シャポは1958年にニコルと共にパリのオペタル通りに設立した高級ショップ「Galerie Chapo」で作品を販売していましたが、そこでは自分の作品と共に、イサム・ノグチなど他の職人や芸術家の作品も展示していました。シャポはノグチの工芸品に対する有機的なアプローチに共感し、二人とも戦後の社会主義の影響下で主流となっていた荒々しい工業的な製品に対して抵抗しました。シャポは、「実用性」以上のものを求めており、家具デザインは美的なものであるべきだと考えていたため、黄金比の重要性を強く主張していました。彼の作品は、古くから伝わる木工技術と伝統に、現代的なアプローチを融合させたデザインです。彼の卓越した作品のデザインには、主にオーク材、ニレ材、チーク材、アッシュ材が使用され、現代的なデザインと伝統的な職人技への2つの関心を明確にしました。1960年には、パリへの貢献に対する感謝の印として、パリ市から金賞を受賞。彼は、個性的で時代を超越した、普遍的なクオリティを持つデザインを支持しました。

シャルロット・ベリアンがアルプスのスキーリゾート、「レザルク」のために制作した作品に影響を受け、1967年の装飾芸術家協会展に参加し、そこでも賞を受賞。同年、家族とともにプロヴァンス地方のアヴィニオン近郊のゴールドに移り住み、その風景に触発されたシャポのデザインは、伝統に根ざした無骨で大胆なものとなっていきました。ゴールドでは、職人たちを雇い入れたことから、彼のデザインに対する需要を満たすことができるようになり「Oeil table」「T01 table」「S01 stool」「T21 Table」「L01 'Godot' daybed」など、戦後のムーブメントに大きな影響を与えた、コレクション性の高い作品を生み出しました。ゴールドに拠点を移してから20年後の1987年にピエール・シャポは他界しました。

その後、息子のフィデル・シャポが父との思い出の地であるゴールドの工房を家具会社「Chapo Gordes SA」として設立、父のデザインと意思を継承し職人であった彼自身も、家具の製作を続けました。父親譲りの卓越した技術力とクラフトマンシップからフィデル・エディションと呼ばれるように、彼が製作した作品も数多くのコレクターから高く評価されました。残念ながら、2021年の暮れにフィデルも享年54歳という若さで他界し、現在はピエール・シャポの孫にあたるゾラン・シャポが会社を引き継ぎ、同じゴールドの地で製作を続けています。

シャポは、フランスが生んだ最高のデザイナーの一人であることは、彼のデザインや職人技を見れば明らかです。

30年のキャリアの中で、彼は家具製作と建具の伝統工芸へのこだわりを一度も失うことはなく、それらが優れた家具に不可欠であると信じていました。作品には、モダンなデザインと伝統的な職人技が融合しており、木材とその特性に対する彼の愛情がすべての作品に表現されています。



Floor lamp "Big Totem"

Size : W180 D180 H1730mm



Floor lamp "Small Totem"

Size : W180 D180 H1170mm





Floor lamp “Small Signal”
Size : W125 D125 H1080mm
W180(base) D180(base) H-mm



Floor lamp “Big Signal”
Size : W160 D160 H1920mm
W330(base) D330(base) H-mm



Floor lamp “Very Big Signal”
Size : W160 D160 H2220mm
W330(base) D330(base) H-mm



Sconce 1 rotating straight arms
Size : W930 D H360mm



Sconce 1 rotating curved arms
Size : W990 D H400mm



Sconce 1 arm 2 swivels
Size : W700 D- H-mm



Sconce 2 rotating straight arms
Size : W1340 D H750mm



Sconce 2 rot. arms, 1 straight, 1 curved
Size : W1750 D- H700mm



Sconce 3 rotating straight arms
Size : W3790 D- H1080mm



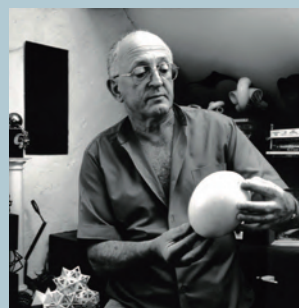
Sconce 4 rotating straight arms
Size : W4660 D- H1600mm



Sconce 5 rotating straight arms
Size : W4500 D- H400mm

SERGE MOUILLE

1922 - 1988



セルジュ・ムイユ

1922-1988

フランス・パリ生まれ。

1922 年 12 月 24 日にセルジュ・ムイユは 3 人兄弟の末っ子として、警察官の父と、在宅勤務の裁縫師であった母の間に生まれました。少年時代は、見た植物や動物を描くのに数え切れないほどの時間を費やしました。葉脈の動き、貝の成長の仕方、動物の骨格や関節の解剖学的構造など、これらのディテールに対する好奇心が、後に彼の作品の大きな特徴となります。

セルジュ・ムイユは、当時のデッサンの先生の勧めで、パリの応用美術学校の入学試験を受けました。どんな学生が学んでいるのかも知らず、両親にも受験することを伝えていなかったセルジュは 13 歳にして試験に合格し、当時の応用美術学校の最年少生徒となりました。応用美術学校では、世界的な彫刻家であるガブリエル・ルネ・ラクロアから金属加工と銀細工を学び、1941 年に卒業した後、彼のスタジオで働くことになりました。

1953 年にジャック・アドネに照明器具のデザインを依頼されたことをキッカケに、その後の人生を照明の製作に捧げました。セルジュは、角ばった昆虫のような大型の壁掛けランプや、複数のアームを持つスタンド型ランプ、さらには小型で曲線を用いた壁掛け型の照明器具をデザインするなど、空間の動きを感じさせる運動的でありながら、彫刻的にも美しいフォルムを追求しました。シェードの形状は、女性の体形からインスピレーションを得ています。彼の最初の照明デザインとなった「スリーアーム・フロアランプ」をはじめとしたこの時期の作品は、主にパリの「Galerie Steph Simon」で展示をされ、この頃からジャン・ブルーヴェ、シャルロット・ペリアンとの交流が始まりました。

1955 年には、フランスの美術館連合組織である Society of Decorative Artists (装飾芸術家協会) と French National Art Society (フランス国立芸術協会) の会員となります。1950 年代の終わり頃、セルジュは施設の照明をデザインするようになり、アントニー大学、ストラスブールとマルセイユの学校、ビゼルト大聖堂の照明を手掛けました。1961 年には、SCM (societe de creation de modeles) を設立し、かつての生徒の一人であるフィリップ・ロジェを雇って、生産面の改革をおこないました。セルジュは、このタイミングでライトやランプのラインに変更を加えるなど、再び自身の作品に新しさを取り入れようとしていました。それまで、産業用としての活用に限定されていた光源である蛍光灯に着目し、新たなフロアランプシリーズである「Les Colonnes」を 1962 年に発表しました。セルジュの代名詞となっていた黒いフォルムを思い起こさせるものではなく、それまでの機能的な照明とは一線を画すデザインとなった「光の柱」は、機能的よりも芸術的な意味合いが強く、丸、四角、直角といった純粋な幾何学的なモチーフは、当時のフランスではあまり受け入れられませんでした。その後、「Les Colonnes」も注目を浴び始め、現在では「Black Shapes」シリーズとならび、オークションにて高額で取引されるセルジュ・ムイユの代表作のひとつとなりました。



Mole Armchair

Size : W1200 D1050 H820mm



Mole Footrest

Size : W820 D480 H450mm



Mole Sofa 2P

Size : W1850 D1100 H820mm



Mole Sofa 3P

Size : W2200 D1100 H820mm



Kilin Armchair [Leather]

Size : W680 D630 H690mm



Kilin Armchair [cowhide]

Size : W680 D630 H690mm





Diz Armchair
Size : W770 D880 H710mm



Diz Armchair Seat & Back: Upholstered
Size : W770 D880 H710mm



Diz Armchair with Wholes
Size : W770 D880 H710mm

SERGIO RODRIGUES

1927 - 2014



セルジオ・ロベルト・サントス・ロドリゲス

1927-2014

ブラジル・リオデジャネイロ生まれ。

ブラジルを代表する建築家やデザイナーとして、傑出した個性を発揮した人物。ジョアキム・テンレイロ、ホセ・ザニン・カルダスらとともに、ブラジルのデザインを工業デザインに転換し、世界に知らしめたパイオニアです。

1952年にリオデジャネイロの国立建築大学を卒業したロドリゲスは、「わが民族の精神」を表現できるようなデザインを求めて、彼自身が言うように「必死の探求」を行いました。機能性を追求した家具や国際的なデザインが重視されていた時代に、ブラジルの気候やのんびりとしたライフスタイルに適した快適さを備えつつ、その土地の文化を反映した家具が必要だと考えたのです。やがてロドリゲスはクリチバに移り住み、ハウナー兄弟と共同でモヴェイス・アルテサナル・パラナエンセを設立します。クリチバ初のモダン家具店として注目を浴びましたが、店は成功しませんでした。1955年、故郷のリオデジャネイロに戻った彼は、ブラジルで最も影響力のある大規模な家具メーカーOCAを設立し、ブラジル家具の生産に新たな局面を告げる店となります。

1950年代から60年代にかけての絶頂期には、モダニズムに則った家具デザインを手がけ、デザインにおいても、革、木、藤といった伝統的な素材を用いて、彼の母国の文化を高揚させました。「Mole Armchair」はニューヨーク近代美術館 (MoMA) のコレクションにもなっており、現在でも垂涎の的となっています。

1968年、ロドリゲスはOCAを退社しましたが、自宅のスタジオでホテルや住宅、職場の家具からプレハブ住宅のシステムまで、さまざまなデザインを生み出し続けました。彼は、自分のプロジェクトの図面だけでなく、家具や日常の風景、そして自分自身を描いたユーモラスなイラストを集めていました。デザイナーであるフェルナンド・メンデス・デ・アルメイダは、彼の師であり、友人であり、いどこである彼のことをこのように語っており、クリエイターの重要性を強調しています。「アーティストとして、また公人としてのセルジオ・ロドリゲスの姿は永遠であり、私たちの生活史や国の歴史と融合しています。ブラジル人アーティストの中で、これほど長い間、私たちの文化、生活様式、そして私たちのあり方を、これほど強い決意で守り続けた人はほとんどいないでしょう。これほど長く生産的な生涯を送ったデザイナーはほとんどいないでしょう。」

セルジオ・ロドリゲスは2014年、リオデジャネイロで逝去しました。

60年のキャリアを通じて、宮殿、官庁、外交官、ホテル、劇場、企業、家庭などに置かれる約1,200ものモデルの家具を制作しました。彼の作品は、それぞれの建築空間の必要性を理解し、その時々利用可能な資源からデザインし、優雅さと想いが集約されています。



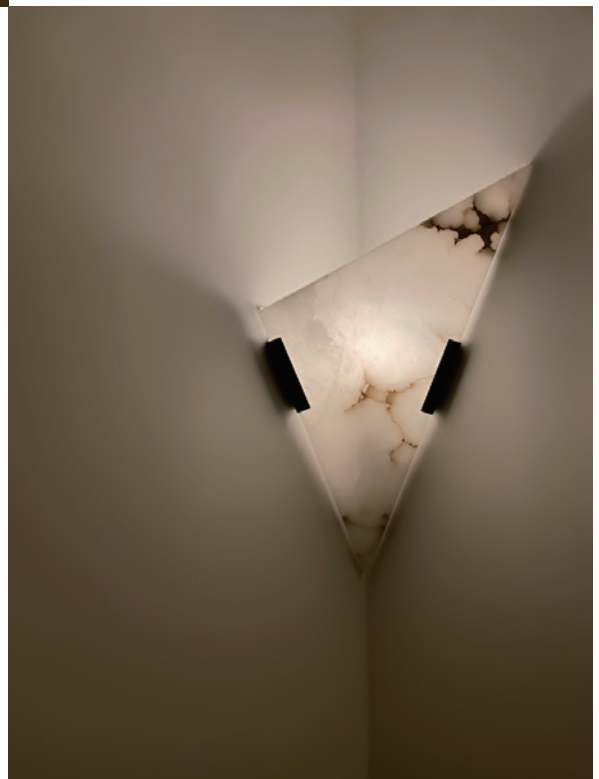
FLY GABY

Size : W254 D152 H228mm



Angle Wall Corner Lamp

Size : W220 D127 H406mm





Nun Lamp-A
Size : W140 D140 H450mm



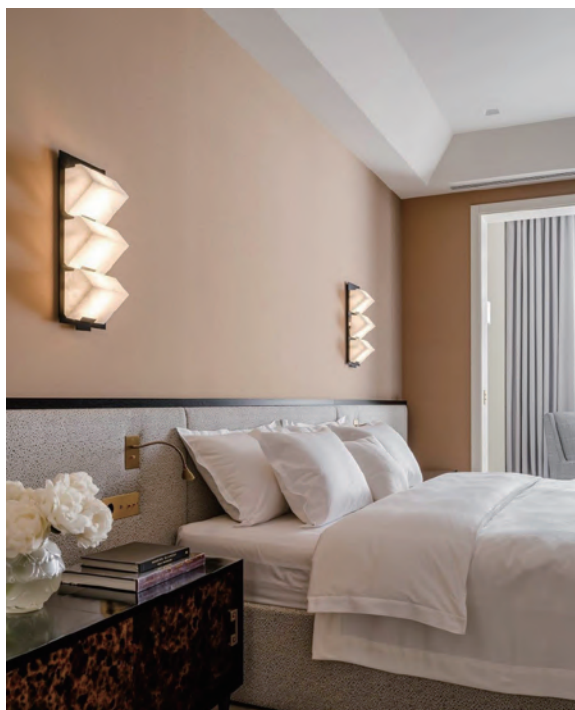
Nun Lamp-B
Size : W250 D250 H810mm



Nun Lamp-C
Size : W300 D300 H910mm



Nun Lamp-D
Size : W400 D400 H1860mm



**SIMPLE -SLOPING BLOCK-
Wall Lamp-145,185,230**

Size : W145 D100 H130mm ~



**DOUBLE -SLOPING BLOCK-
Wall Lamp-145,185,230**

Size : W145 D100 H270mm ~



**TRIPLE -SLOPING BLOCK-
Wall Lamp-145,185,230**

Size : W145 D100 H400mm ~



**SIMPLE -SLOPING BLOCK- Wall
Lamp on Metal Frame-145,185,230**

Size : W225 D110 H220mm ~



**DOUBLE -SLOPING BLOCK- Wall
Lamp on Metal Frame-145,185,230**

Size : W185 D110 H350mm ~



**TRIPLE -SLOPING BLOCK- Wall
Lamp on Metal Frame-145,185,230**

Size : W185 D110 H480mm ~



PIERRE CHAREAU

1883 - 1950



ピエール・シャロー

1883-1950

フランス・ボルドー生まれ。

当初は、絵画や音楽などにも関心があったものの、パリの Ecole des Beaux Arts ,ENSBA(国立高等美術学校) で 建築学を学びました。1908 年に卒業後、シャローはパリに拠点を置く英国の家具会社に勤務し、その後、小規模のインテリアプロジェクトを数多く立ち上げました。シャローが最初に完成させたプロジェクトの一つである友人の Jean Dalsace 博士の書斎 / 寝室のデザインは、パリの Salon d' automne で展示され、その後、ダルサース博士は自邸の設計をシャローに依頼しました。これが彼の代表作となる「ガラスの家 / Maison de verre」の誕生でした。彼は家具、照明、建築デザインに対してモダンなアプローチを取り入れ、マホガニー ローズウッド、アラバスターといった自然素材に、金属やガラスなどの戦後主流となっていた工業的な産業資材を組み合わせました。シャローの作品の特徴は、当時としては珍しい素材の組み合わせでした。

1930 年代は、ファシズム、反ユダヤ主義の台頭、後の第二次世界大戦の勃発によって、ユダヤ人の芸術家、建築家、クライアントの間の絆が強まり、多くのコミュニティが生まれました。ガラスの家をはじめ、シャローのクライアントの殆どはユダヤ人だったと言われています。

1940 年にナチスがフランスを占領した後、自身もユダヤ人だったシャローは、家族を連れてアメリカに亡命をしました。ジャン = ミシェル・フランクとならび、シャローはナチズムの脅威から逃れなければならなかった最も有名なフランス系ユダヤ人デザイナーの 1 人とされており、この出来事が、フランスで順風満帆なデザイナーとしてのキャリアを送っていたシャローの人生を大きく狂わせることとなります。これまでの功績諸共、ナチスによって追放されてしまったシャローは、自身が保有していたモンドリアン、ピカソなどの作品を売り払い、ニューヨークでデザイナーとしてのキャリアの再構築を図りました。近代美術館 (MOMA) などに個展の売り込みを続けましたが、当時の政治的影響により全く相手にされることなく、1950 年に志半ばで人生を終えることとなりました。

戦前、戦後のモダニズム建築史を語る上での最重要人物でありながらも、フィーチャーされることが少なかったピエールシャローの作品は、美術品オークションカンパニーの Sotheby' s、ニューヨークの The Jewish Museum の尽力によって、現代で再び脚光を浴びることになりました。シャローの苦難な人生から約 60 年が過ぎた 2016 年には、アメリカの The Jewish Museum でシャローの念願だったアメリカでの個展が開催されました。単にこういった背景があるから注目されたのではなく、シャローの作品のデザイン性と理念も高く評価されています。

Rectangle Carpet【KENMOCHI-C】

Size : W2100 D1620 H16mm



Round Carpet【KENMOCHI-B】

Size : W3000 D3000 H19~54mm



Square Carpet【KENMOCHI-A / NO.02】

Size : W2400 D2600 H44~54mm



Square Carpet【KENMOCHI-A / NO.01】

Size : W2400 D2600 H44~54mm



Square Carpet【KENMOCHI-A / NO.03】

Size : W2400 D2600 H44~54mm



Rattan sofa [C-3150-L]

Size : W2100 D800 H770mm



Rattan Lounge Chair

Size : W750 D750 H720mm



Stool [S-3020]

Size : W380 D380 H340mm





KASHIWADO Chair
Size : W850 D770 H630 SH330mm

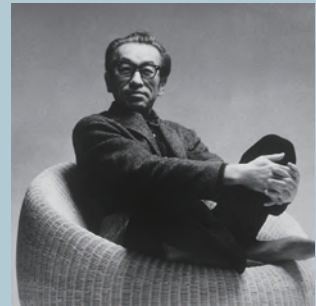
ISAMU KENMOCHI

1912 - 1971

イサム・ケンモチ

1912 - 1971

日本・東京生まれ。



剣持勇は、日本を代表するインテリアデザイナーです。ジャパニーズモダンと称されるデザインの礎を柳宗理らと共に築いた人物でもあります。剣持は、1932年に東京高等工芸学校木材工芸科を卒業後、商工省の工芸指導所に入所し技師となります。翌年に工芸指導所に来日したドイツ人の建築家ブルーノ・タウト氏のもとで椅子などの「規範原型」の研究を行いました。

1950年には、来日したイサム・ノグチと出会い、丹下健三の指揮のもと、3人による共作のバンブーチェアが誕生しました。1952年には、渡辺力氏や柳 宗理氏らと共に、日本インダストリアルデザイナー協会の設立に協力し、1955年に剣持デザイン研究所を設立。

剣持勇の作品は、美しさ、機能性、持続可能性の融合を体現しており、世界中で人々に影響を与え続けています。1964年には、「ラタンチェア」が、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の永久所蔵品に選定されました。多くの傑作と呼ばれるプロダクトを誕生させ、ジャパニーズモダンデザインの向上に広く貢献しました。



The Chair 3legs

Size : W500 D470 H685 SH455mm



The Chair 4legs

Size : W500 D470 H685 SH455mm



The Counter Stool

Size : W545 D470 H840 SH610mm



The Backless Stool-A,B,C
3Size



[Option]The Danish Cord Back



The Marolles Bar Stool 3legs
Size : W545 D470 H990 SH760mm



The Marolles Bar Stool 4legs
Size : W545 D470 H990 SH760mm

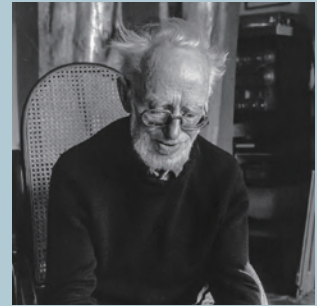


at SHIROIYA HOTEL - Gunma -



JEAN TOURET

1916 - 2004



ジャン・トゥレット

1916-2004

フランス・ラセ＝レ＝シャトー生まれ。

1930年代から主にインスピレーションを受けましたが、1930年代は、マルクス主義の社会主義、資本主義の民主主義、共産主義とファシズムの全体主義など、さまざまな政治的イデオロギーがぶつかり合った時代でした。

パリ・ボザール校を卒業した若き日のトゥレットは、第二次世界大戦中に捕虜となり、南ドイツのヘルツヘビルゲの森林地帯に送られ、木こりとして働くことを余儀なくされました。そこで彼は、農民の素朴な生活、自然、木工を発見し、フランスに戻ると、新しい人生観に目覚め、パリを離れ、友人の画家モーリス・ロシェに従ってプロワ近郊の小村マロールに移住しました。村の大工エミール・ルロワと親しくなり、3人の職人（鍛冶屋アンリ・ヴィオン、籠職人エドモン・ル・フロヒック、陶芸家マニュエル・ゴールド）と出会い、工芸協同組合「アトリエ・マロール」設立しました。彼らの共同作業と卓越された技術によって、革新的な家具の新モデルが誕生したのです。彼らの作品の前提やアイデンティティは、ミニマルな世界という概念を軸に、木や金属などの自然素材の使用を取り入れたものでした。

トゥレットのユートピアは、1950年代、伝統的なノウハウを認めず、工業材料で作られた画一的な家具を求める風潮を否定するものでした。トゥレットは、職人たちの適性を結集し、家具や装飾品を製作するクラフト・アソシエーションを設立することを決意します。それは、素朴な家具の原型を継承しつつ、シンプルで高貴な、現代的な美を追求すること。素朴な家具の原型を残しつつ、シンプルで高貴な、現代的な美学を発展させるという野望が生まれたのです。そして、成功を収めました。1964年からは、「マロールとロワールとシェールの職人たち」（通称「アルチザナ・ド・マロール」）の芸術監督を離れ、絵画に没頭するようになりました。

1970年頃、同団体は解散します。ジャン・トゥレットは、息子のセバスチャン・トゥレットと共に、多くの教会や礼拝堂のレイアウトや装飾、すなわち彫像、祭壇、幕板を制作しました。彼らのデザイン哲学は、物質の中に生命を求め、控えめでありながら爽快な存在感を生み出し、それに寄り添い、喜ばせることにありました。彼らはこれを、ブルータリズムの手法で、非常に控えめでありながら緻密な美学で表現しました。いまやブルータリズムの家具は、モダンなインテリアの一部となっています。同じように、ブルータリズムのインテリアデザインは、トップクラスのインテリアデザイン・プロジェクトの中に垣間見ることができるのです。



DW 02 Book Shelf Small
Size : W1100 D180 H780mm



DW 02 Book Shelf Large
Size : W1755 D180 H780mm



DW 03 Chair
Size : W500 D460 H810mm



DW 01 Stool

Size : W395 D395 H415mm

| DEREK WELSH



デレク・ウェルシュ

スコットランドのグラスゴー在住のデレクは、手作業での木工制作を25年以上の経験を積んでいます。彼は小さな工務店の見習い時代から、オーダーメイドのインテリアマテリアルや家具の制作を手掛けてきました。彼の作品には、手仕事の技術と限界、喜び、そしてそれらを追求する厳しさへの敬意が反映されています。彼の作品に欠かせないのは、「今まで作ったことのないものを作りたい」という飽くなき欲求だといいます。独立後のDerek Welsh Studioでもなお、高品質のクラフトマンシップに忠実であり続けています。



Room Divider

Size : W1550 D45 H1600mm~



Coffee Table

Size : W1400 D1000 H300mm



Book Shelf

Size : W1400 D230 H150mm



Floor Lamp

Size : W300 D300 H1400mm



Trestle Table

Size : W1600 D800 H720mm~



Table Lamp

Size : W400 D400 H815mm



Modular Sofa Unit (Both Arms)
Size : W1250 D890 H620 SH380mm



Modular Sofa Unit (One Arm)
Size : W1130 D890 H620 SH380mm



Modular Sofa Unit (Armless)
Size : W1010 D890 H620 SH380mm





Side Table

Size : W750 D375 H210mm~



| X+L
-

エクセスアンドエル



x+lは、オランダのアムステルダムを拠点とするデザイナー、Xander VervoortとLeon van Boxtelです。舞台や撮影のための美術にバックグラウンドを持つ二人は、1996年にインテリアデザインのためのx+l studioを設立しました。彼らは長年に渡り、写真、広告、舞台美術、ファッション、展示デザインなど、さまざまな分野で活躍してきました。これらの依頼されたプロジェクトに加えて、一点物や非常に小数のみ生産するハンドメイドのオブジェクトを制作しています。職人の友人とも密接に協力し、x + lらしさを常に探求しながらものづくりをしています。彼らの作品の魅力は不規則さにあります。ハンドメイドだからこそ生み出すことができる、デザインやテクニックを用いて、それらの不完全性が、美しさとしてあらゆる人に受け入れられるような活動を目指しています。



Mungaru Dining Chair
Size : W495 D505 H770 SH455mm



Mungaru Easy Armchair
Size : W715 D630 H735 SH395mm



Mungaru Gallery Chair
Size : W535 D570 H730 SH420mm





Tangāli Modular Chair(Both Arms)
Size : W710 D595 H690 SH380mm



Tangāli Modular Chair(Armless)
Size : W565 D595 H690 SH380mm



Tangāli Modular Chair(One Arm)
Size : W640 D595 H690 SH380mm



Tangali Side Table
Size : W550 D550 H385mm



Tangali Coffee Table
Size : W1050 D1000 H410mm



Tangali Day Bed
Size : W745 D1900 H410 SH410mm



Tangali Bench
Size : W435 D1800 H410 SH410mm



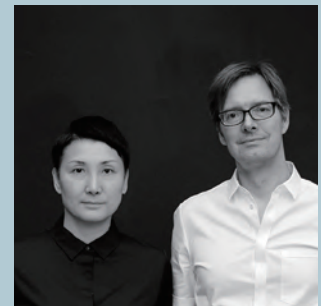
Mungaru Side Table

Size : W395 D330 H505mm

| INODA + SVEJE

イノダ+スパイエ

1996-



イノダ+SVEJEは、建築デザインの専門家であり、2000年にコペンハーゲンで設立され、後にミラノに拠点を移したデザインスタジオです。彼らはデザインプロセスにおいて調和と美しさの要素を組み合わせる繊細なアプローチを開発し、外部デザイナーとして様々なプロジェクトに取り組んでいます。特に、スタートアップ企業やハイテク機器分野でのデザインに関与しています。

彼らのプロジェクトの一つは、チャンディーガルの家具を再編集する取り組みで、このプロジェクトは同じ「ものづくりの哲学」に基づいた新しい作品を創造することを目指しています。そのために、PhantomHandsとのコラボレーションが始まりました。

Phantom Handsは、INODA+SVEJEがデザインしたDC10とDC09の椅子に魅了され、彼らとコンタクトを取りました。2人は、PhantomHandsの工房を訪れて職人の技術を学び、デザイナーと職人のハンズオンコラボレーションを重視しました。その結果、Mungāru Gallery Chairという椅子が生まれたのです。この椅子はすべて手作業で製作されており、モンスーンの到来と共に椅子のデザインと試作が行われたことから、カンナダ語で「モンスーン前の穏やかで生命力を与える雨」を意味する「Mungāru」という名前が付けられました。

DESIGNER

	Pierre Jeanneret	◆	Gianfranco Frattini
◇	Lina Bo Bardi	◆	Jorge Zalszupin
◇	Pierre Chapo	◆	José Zanine Caldas
◆	Serge Mouille	◆	Martin Eisler
◆	Sergio Rodrigues		Isamu Noguchi
◆	Pierre Chareau		Derek Welsh
◆	Jean Touret		x+l
	Isamu Kenmochi		INODA+SVEJE

*「◆」の印が付いているデザイナー商品は、全アイテムの卸売が可能です。

*「◇」の印が付いているデザイナー商品は、一部アイテムの卸売が可能です。

掛け率はデザイナーによって異なりますので別途お問合せください。

*コントラクト割引・・・10%（ボリュームディスカウントの場合は15%）

BRAND



EDITIONS SERGE MOUILLE



LinBrasil



Galerie **MCDE**
édition Pierre Chareau

Tendo.



Furniture Marolles



ABOUT US

Art Modern Japan 株式会社 CASA DE : 東京都板橋区小茂根 2-13-10

Tel : +81 (0)3 6276 5323 / contact@gallerycasade.com

Open by appointment only.



CASA DE